

アートボランティアに関する研究 -アートプロジェクトにおける活動を中心として-

Research on an art volunteer

- It is mainly activity in an art project -

○長尾芽生¹, 佐藤慎也²
*Mei Nagao¹, Shinya Satoh²

The art project is undertaken in the whole country. The common feature of that is a volunteer's existence. They are expected making the relationship with the people in there. However, there are various difficulties that the art volunteer who came from the outside getting a local resident's understanding and cooperation, and developing activity over a long period of time. The volunteer is important when making a local adhesion type art project successful. A volunteer's present condition is investigated and a future art volunteer's state is considered. With literature documentation, investigation comparison is carried out about the present condition of the volunteer of an art project. Moreover, the "kohebi tai" which is an art volunteer organization of "the Art Festival Echigo Tsumari triennial" is joined, and hearing investigation is conducted.

1. はじめに

近年, 全国のまちで行われているアートプロジェクトにおいて共通するのは, ボランティアとして活動を支える人々の存在である. 彼らは活動の中でその地域との密接な関係をつくっていくことが望まれる. しかし, 外部からやってきたアートボランティアが, 地域住民の理解・協力を得て長期間にわたり活動を展開することには, 様々な困難が存在しているのが現状である.

2. 研究目的と方法

地域密着型のアートプロジェクトを成功させる上で重要な要素のひとつであるボランティアの現状について調査し, 今後のアートボランティアの在り方を考える.

文献調査とともに, 全国のアートプロジェクトのボランティアの現状について調査比較する. また, 「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」のアートボランティア組織である「こへび隊」に参加し, ヒアリング調査を行う.

3. アートプロジェクトとボランティア

3-1. アートボランティアのはじまり

全国の美術館, 劇場・ホールなどに設立されている「友の会」は, アートボランティアの先駆けとなる団体であり, 80 年代後半からそれに代わり「美術ボランティア」が導入されるようになった. 美術館へのボランティア制度の導入は, 1990 年以降, 顕著に見られる. バブル経済の崩壊がそのブームに拍車をかけ,

企業のボランティア休暇・休職制度導入, 各地の行政のボランティア政策, 大学のボランティアカリキュラム導入, 国立美術館の独立行政法人化など後押しもあり, 美術館はより多様なプログラムを提供する教育普及の場として, 市民ボランティアが活躍するようになった.

3-2. アートとまち

1990 年代以降のアーティストたちは, サイトスペシフィックを求める傾向にありまちなかで行われる, 多くの人を巻き込んでネットワークを築きながら活動していくアートプロジェクトという形態がよく見られるようになった. 今までのアートプロジェクトと大きく異なり, 鑑賞者がボランティアやワークショップに参加することによって, 作品と参加者が, あるいは参加者同士がつながる形態が見られた. これは「まちづくり」や「コミュニティの強化」といった面から見ても, 非常にふさわしい形であった.

3-3. ボランティア参加の現状

最近の調査^註によると, 日本人の 32.7% がボランティア活動 (有償も含む) に参加している. 参加する大きな理由としては, 「仲間ができるから」というものがある. また, 他の調査では地域での孤独を感じる人が 12% と圧倒的に高い数値を示していることから, 地域コミュニティが希薄になっていることが伺える.

そして地域活動への参加を妨げる要因としては「参加するきっかけが得られないこと (82.3%)」「身近に団体や活動内容に関する情報がないこと (69.1%)」などが挙げられた.

1 : 日大理工・院 (前) ・建築、Graduate Student., Dept. of Architecture, CST., Nihon-U.

2 : 日大理工・教員・建築、Assoc. prof., Dept. of Architecture, CST., Nihon-U.

4. 事例調査による分析

4-1. 調査対象

- 現在行われているアートプロジェクトの中で、
- ・現在も継続して活動が行われているもの
 - ・特定の地域に密着した活動が行われているもの
 - ・HPによる調査が可能なもの

の3条件を満たす計75事例を調査対象とする。

4-2. 調査方法

ボランティアの現状について知るために、i) ボランティアの活動期間、ii) 活動拠点、iii) 彼らをまとめる運営団体の3つで分類し、共通要素を抽出した。

4-3. 調査結果

以下の3つの点において大きな特徴があることが分かった。

図1 活動期間について



図2 交流拠点について

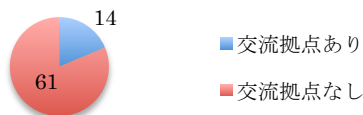
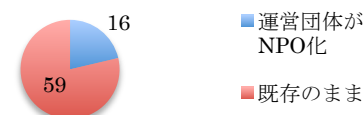


図3 運営団体について



5. こへび隊員へのヒアリング調査

「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」のボランティア組織である「こへび隊」に実際に参加し、参加者へのヒアリング調査を行った。

5-1. 調査方法と調査対象

2011年10月、夏の活動が終わり、来年の第4回大地の芸術祭に向けたPR活動／越後妻有の冬支度／冬のイベント企画に関する活動に参加した。

5-2. 調査結果

主に20代から40代の男女各5名にヒアリングを行った。

- ・参加理由

引きこもり防止のため／職場とは別のコミュニティがほしい／新しい人々との出会いがほしい

- ・活動前後の不安

人数が多いから毎回同じ人に会えるとは限らないところ／地域住民と触れ合うときは年配の方が多からな始めるかどうか

- ・活動にあたっての予備知識

初めての参加者は研修などがあったほうが期待感が増すと思う

- ・活動内容について

大抵は満足がいく活動ができている／しばしばスケジュールに無理がある／会期中は忙しい

- ・今後のサポーター活動について

スタッフが少ないため、これ以上サポーターが増えたら大変だと思う／もっとボランティア同士の交流の場をもちたい／学生のボランティアが社会人になってからも来続けてくれるような団体にしたい

- ・今後も活動を継続したいか

できる限り参加し続けたい／人が少ない活動になら参加したい

5-3. 考察と今後の展開

こへび隊は人数が多いため、参加者間の希薄な関係という問題が目立った。都心からの参加者のための情報交流拠点となる場が都心にもあれば、より濃いコミュニケーションがとれるのではないだろうか。

6. まとめ

研究開始当初は、アートボランティアの活動は個人の意識や人との関係性によるのではないかと考えていたが、研究を通して環境的な問題に大きく左右されることが分かった。第5章で述べた3つの要素はすべてまちとアートを1セットに考えるための仕組みではないだろうか。他にもアートとまちをつなげておく術はあるだろう。会期、場所、人を選ばずに、人々がいつでもアートに触れ合う環境をつくり出すことが重要なのである。今後も様々な新しい取り組みに期待したい。

7. 参考文献

[1]ドキュメント2000プロジェクト実行委員会：社会とアートのえんむすび、トランスアート、2001.8

[2]納屋嘉治：私も美術館でボランティア、淡交社、1999.12

[註]2010年度国民生活選好度調査、内閣府